



リメイクに東洋の香り加えて

松本 侑壬子・ジャーナリスト

かつて、尊敬する小津安二郎監督に捧げる日本映画「珈琲時光」（2003年）を東京で製作した台湾の Hou・シャオシェン監督が、今度はフランスの名作のリメイクに挑戦、オリジナルとは一味違う不思議な味わいのフランス映画を製作した。

A・ラモリス監督『赤い風船』（1956年）は、同じ監督の『白い馬』（1953年）とともに、映像詩の不朽の名作として知られる。本作は半世紀以上を経て、Hou監督が現代のパリを舞台に新たに中国人女子留学生の役を加えた現代版『赤い風船』である。

街角で大きな赤い風船を少年が拾う。風船は、電車やバスには乗れない、家でも学校でも持ち込み禁止。あげく、悪童どもに寄ってたかっていじめられ、はじけてしまうが…。たくさんの風船とともに少年が青空へと上っていくラストシーンは、メルヘンそのものだったオリジナル版。

ホウ版はメルヘンというよりももっと人間くさいドラマだ。7歳の少年シモンをめぐる現代の大人たちの人間模様。とりわけ、多少エキセントリックな母親と穏やかな中国人女子留学生のベビーシッター／家庭教師とが、次第に友情

に近い心のふれあいを深めていく姿が新鮮だ。同じような状況設定でも、時代と監督の個性でいかようにも違った味わいの作品になることが実感できる。

シモン（シモン・イテアニユ）は通学途中に地下鉄の階段の入り口で大きな赤い風船を見つけた。でも、高くて手が届かない。あきらめて電車に乗ったシモンを風船が勝手に追いかけて来た。そのころ、自宅に中国人の留学生ソン（ソン・ファン）が訪ねて来た。シモンの母親のシュザンヌ（ジュリエット・ビノシュ）は人形劇の俳優で、新作公演を前に多忙になったので、ソンがシモンの面倒を見ることになったのだ。学校からの帰り道、ソンはシモンにラモリス監督の名作『赤い風船』の舞台になったパリの町並みを歩きながら、シモンに映画のことや自分自身のことを話して聞かせる。シモンは興味津々。

帰宅すると、シュザンヌが、下の部屋の住人が勝手に台所を使って汚したままだと激怒している。住人はシュザンヌの友人だが、追い出そうにも契約書が見つからなくてまた大騒ぎ。別居中の夫から電話がかかると、その無責任な優柔不断さにまたまた怒りが爆発して…。感情の起伏の激しい芸術家タイプのシュザンヌの気持にそっと寄り添うシモン。静かに見守るソン。やがて、自宅の壊れたピアノをソンが連れてきた盲目の調律師が直し、まるでシュザンヌを労るように美しい音色の旋律を奏で始める。

赤い風船は？ そう、現代の赤い風船は、すべてを中空からそっと見守っていた。シモンを空のかなたへ運び去るのではなく、地上のシモンの姿を慈しむようにつかず離れずに。リアリティがありながらやさしさにあふれたさり気ないラストシーンに心が癒やされる。

『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』

フランス映画（113分）／ホウ・シャオシェン監督

7月よりシネスイッチ銀座他全国順次ロードショー

© 3 H PRODUCTIONS-MARGO FILMS-LES FILMS DU LENDEMAIN-ARTE France Cinema

